

【問題】（演習）

出典：韓愈『師説』／中央大学 文学部 00年

書き下し文

古の学ぶ者は必ず師有り。師は道を伝へ業を授け惑ひを解く所以なり。人は生れながらにして之を知る者に非ず。孰か能く惑ひ無からん。惑ひて師に従はずは、其の惑ひたるや終に解けじ。吾が前に生れ、其の道を聞くや固吾より先だてば、吾従ひて之を師とせん。吾が後に生れ、其の道を聞くや亦吾より先だてば、吾従ひて之を師とせん。吾は道を師とするなり。夫れ庸ぞ其の年の吾より先後生なるを知らんや。是の故に貴と無く賤と無く長と無く少と無し。道の存する所は、師の存する所なり。嵯乎、師道の伝はらざるや久し。人の惑ひ無からんと欲するや難し。古の聖人は、其の人に出づるや遠し。猶且師に従ひ問ふ。今の衆人、其の聖人より下れるや亦遠し。しかも聖人に学ぶを恥づ。是の故に聖は益聖に、愚は益愚なり。聖人の聖たる所以、愚人の愚たる所以は、其れ皆此に出づるか。

現代語訳

昔の（道を）学ぶ者には必ず師がいた。師とは、道を伝え学業を受け惑いを解く存在である。人は生まれながらにして（道を）知つてゐるものではない。誰が（道について）惑わないでいられようか、いや、惑わずにいられる者などない。（しかし）惑つて（いながら）師に従わなければ、結局（その惑いは）解決することができないだろう。私より先に生れ、その人が道を聞き知ることが元来私より先んじているなら、私は（それに）従つてその人を師としよう。私よりも後に生れ、その人が道を聞き知ることが同じように私に先んじているなら、私は（それに）従つてその人を師としよう。私は道を師とするのである。そもそもどうしてその（人の）年齢が私より先か後かということが（その人を師とするにあたつて）関係があるだろうか、いや、そんなことはまったく関係はない。だから、身分が

高かろうが低かろうが、（私より）年長であろうが年少であろうが（何の問題もないのだ）。道のあるところが、師のいるところなのである「〔道を体得した人が、師とすべき人である〕」。ああ、師としてあるべき姿が伝わらなくなつて久しい。（そして）人が（道について）惑いをなくそうと思つても（それは）難しい。昔の聖人の（普通の）人より傑出していることは（普通の人の程度から）はるかに遠い。（それでも）なおかつ師に従つて（疑問点を）問うた「〔学問をした〕」のだ。（それにひきかえ）今の普通の人は、その聖人に劣つていることは（聖人が傑出しているのと）同様に（聖人からの距離は）はるかに遠い。それなのに師に従つて学ぶのを恥と思つてゐる。だから聖人はますます聖となり、愚人はますます愚となる。聖人が聖である理由も、愚人が愚である理由も、皆この点から発してゐるのではないだろうか。

解答

問1 C

問2 A

問3 庸知_三其年之先_二後_一生於吾_一乎。

問4 年長・年上

問5 聖人は凡人（普通の人）よりもはるかに優れていた（傑出していた）、という意味。〔解答例〕

【問題】(自習)

出典：蘇軾『東坡題跋』（巻四 記与君謨論書）／南山大学 文学部 96年

書き下し文

字を作すは手の熟するを要す。則ち神気完美にして余韻有り。静中に於て、自ら是れ一の樂事なり。然れども常に暇少ぎを患ふ。豈に其の楽しむ所に於て常に足らざるか。蘇子美の死せしより、遂に筆法の中絶せしを覺ゆ。近年蔡君謨當世に独歩せしも、往往譲讓して、盟を主るを肯んぜず。往年予嘗て戯れに君謨に謂ひて言く、書を学ぶは急流を泝るがごとし。氣力を用ひ尽くして、旧処を離れずと。君謨頗る諾びて以て能く譬を取ると謂へり。今此の語を思ふに、已に四十余年なり。竟に如何ぞや。

現代語訳

文字を仕上げるのは「=みごとな字を書くには」手が熟練することを必要とする。（そうすれば）その時は精神や氣力が充分備わり満ちあふれて（その文字には）余韻が生じる。（そうすると）平静な（暮らしの）中で、自然とこれは一つの楽しみ事なの「=自然とみごとな字を書くことが一つの楽しみになるの」である。しかしこも（自分の暮らしには）余裕のある時間が少ないのを思い悩む。なんと（私たちは）その楽しむことに関していつもならないのか「=なんともまあ、私たちは生活にゆとりがなくて、自分たちの楽しみを求める気持ちにいつも欠けているのか」。蘇子美が死んだときから「=蘇子美の死後」、かくて（優れた）書法が途絶えてしまったと思われる。近年（になつて）蔡君謨が当代に優れて並ぶ者がないのだが、（蔡君謨は）常々（自分の腕前について）謙遜して、（書壇の）仲間の頭を統べるのをよしとしない「=書壇の指導者の立場に立つことを承諾しなかつた」。昔私は以前におどけて君謨に話して言うことには、「書を学ぶことは急流を邁上するようなものだ。（というのも、流れに逆らつて邁上しようと）氣力を使い果たして（少しは進んだかと思つても）、以前の場所を離れていない（からな）のだ」と（言つた）。君謨は大いに頷いてそして「うまく例えを捉えた「=なるほど、うまい例えだ」と言つた。今この（蔡君謨との）会話を思うに、（あれから）すでに四十年以上（が経つたの）である。（私の方は、相変わらず書法に進歩が見られないが）結局（みごとな字を書くには）どのように（したらよいのだろう）か（いまだに私にはわからないのである）。

問1 ア 問2 ア 問3 エ 問4 イ 問5 ア 問6 エ 問7 肯「本文3行目」

問8 遂「本文2行目」 問9 学レ書如レ泝「急流」 問10 作字要手熟「5字・本文1行目」

解説

問1 選択肢からわかるように、接続語句を決定する問題である。したがって、正解を得るためには、空欄前後の論理的関係を明らかにすることと、各選択肢の接続機能の確認が必要である。

まず、空欄Aの後ろに書かれているのは、「常患少暇」（いつも時間がないのが辛い）ということである。空欄の前には何が書かれているかを考えよう。本文冒頭に、「作字要手熟。」とあるのに着眼する。これは、「文字を仕上げる（みごとな字を書く）」のは手が熟練することを必要とする」ということである。「手が熟練する」ためには、時間が必要であるから、この部分は、「字が上達するには時間が必要である」と言い換えられよう。すると、空欄Aの前後で、「字が上達するには時間が必要なのに、時間がないから辛い」と言っていることになる。つまり、前後の関係は、逆接である。

次に、各選択肢の意味を見ていくと、アは逆接、イは並列、ウは結果、エは仮定条件である。したがって、正解はアである。

問2 空欄補入問題。選択肢を見ると、すべて「時を表す語句」であるから、空欄Bに入る語句が係る述語の時制を考えれば、どれを入れればよいかわかる。そこで時制の判断をする。ただし、中国語には動詞の語形変化もなければ時制の助動詞も存在しない。これは現代語でも同じである。時間を表す表現は、実は「時を表す副詞」しかない（ただし、現代中国語では、過去または完了をあらわす終尾詞が存在する）のである。よって、Bに何が入るかは、この近辺に存在しているはずの「時を表す副詞」によって決める。

このような観点で空欄の後ろを見ると、「嘗（かつて）」が見つかる。これは、過去を表す副詞である。よってBに入るのも過去を表す副詞でなければならない。そうすると、可能性のある選択肢はアかウであるが、『今春』のように、春と限定する理由はどこにもないので、正解はアである。

問3 空欄補入問題。空欄Cは君謨の科白の一部である。筆者が書を学ぶことの困難さを急流を溯ることに譬えたのに対し、君謨がそれを評して口にした言葉である。したがって、彼の評価の内容がどうであるかによって解答は決まる。ところが、直前に「諾ヒテ」とある。「諾」は「許諾」「承諾」の「諾」であるから、君謨の筆者の譬えに対する評価は「肯定」である。選択肢のうち肯定の二ユアンスをもつものは、エ「能」しかない。

問4 部分解釈問題。前後の文脈を考えれば容易に答えはわかる。君謨は「独歩せしも」「謙讓し」とあるのだから、「『独歩』しているのだから、本来は尊大になつてもおかしくないのに、謙讓である」という関係がある。この文脈を可能にするためには、「独歩」＝「偉い」という意味である必要がある。これと類似の意味の選択肢はイしかない。

問5 部分解釈問題。これも前後の文脈を丹念に追えば容易に正解が得られる。傍線部を含む一文の意味を、**問4**の解答も参考にしながら展開すると、

君謨は、優れていた（から「主盟」することを求められた）が、謙遜して「主盟」しなかつた
となるから、

優れている → 「主盟」するはず

という因果関係が読み取れる。この関係が成立させる「主盟」の意味は、選択肢の中ではアのみである。

問6 文学史の問題。漢文の文学史の出題率は古文に比べても決して高くはないが、この程度の問題には答えられるようにしておきた
い。おのおのの選択肢につき簡単にポイントだけあげておくので、ぜひこの機会に押さえておいてほしい。

ア 杜甫。字は子美。盛唐の大詩人。「詩聖」と呼ばれる。「漂泊の詩人」として、社会の矛盾や人生の苦悩をうたつた数多くの名詩を残す。松尾芭蕉がこよなく愛した詩人であることは有名。また、「酒の詩人」「詩仙」と呼ばれる李白と並び称せられることも多い。

イ 朱熹。南宋時代の儒学者。四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）などに注釈を付けた。朱子学の祖。江戸時代の漢学として採用されたのはこの朱子学であり、日本の封建思想の祖ともいえる。

ウ 司馬遷。前漢の歴史家。全百三十巻に及ぶ大歴史書『史記』を著す。友人李陵を弁護したことにより、武帝の怒りに触れ、宮刑に処せられるが、その怒りをばねに『史記』を完成させたという。

エ 王安石。北宋の文章の大家。いわゆる『唐宋八大家』の一人。なお、『唐宋八大家』を列挙すると、

【唐】 韓愈、柳宗元

【宋】 欧陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏

オ 王維。盛唐の詩人。自然を愛し、自然美の世界を表現した詩を多く残している。李白の「詩仙」、杜甫の「詩聖」と並び、「詩仏」と称せられる。仏教に親しんだためである。

問7 語彙問題。漢字の意味（＝「訓」）がわかりにくいときは、そのまま行うべきは、その漢字を含む熟語をいくつか挙げてみることである。

問3の解説でも述べたように、「諾」は「許諾」や「承諾」の「諾」であるから、「イエスと言う」ぐらいの意味であることが分かる。これと同じ意味の字を文中で探すと、「肯定」の「肯」が見つかる。

問8 語彙問題。「竟」を見たら「畢竟」という熟語を思い出さねばならない。意味は「結局」と言う意味で、現代文にもよく出てくる頻出語である。「畢」も「竟」も「最後」ぐらいの意味である。ここでは、「ニ」という送り仮名が送られており、副詞として使われているから、意味と照らし合わせて、「つひに」と読むのが適当だと判断できる。よって本文2行目の「遂」が正解となる。

問9 返り点を付ける問題。非常に簡単。書き下し文から、この文の基本構造は、「A如レB」となり、

A＝「学^フ書^ヲ」

B＝「斥^ル急流^ヲ」

となるから、まとめて解答のようになる。

問10 主題を求める問題。主題は、基本的に「A（論題）はB（叙述）」となっている。したがって、まずは、論題が何なのか（何について書かれているのか）判断する。本文中にある「作^レ字」「筆法」「学^レ書」といった語句から、この文章での論題が、「書道」

であることは明らか。また、この論題についての叙述内容を考えると、「要_二手熟_一」「如_レ斥_二急流_一」「用_三尽氣力_一不_レ離_二旧處_一」といった記述から、「困難な道だ」と言つてゐることがまた明らかである。そして、これについて五字程度で端的に表現しているのは、冒頭の一文しかない。

漢文では、第一文で主題を述べ、それについて以降の文で例証していくというパターンが非常に多いので注意。

●
メ
モ
●

【問題】（演習）

出典・王安石『臨川先生文集』「傷_二仲永」／上智大学 文学部 96年

書き下し文

金谿の民方仲永、世隸耕す。仲永生れて五年、未だ嘗て書具を識らず。忽ち啼きて之を求む。父異とす。旁近に借りて之を與ふ。即ち詩四句を書し、并せて自ら其の名を爲す。其の詩父母を養ひ族を收むるを以て意と爲す。一郷の秀才に傳へて之を觀しむ。是れより物を指して詩を作らしむるに、立ちどころに就る。其の文理皆觀るべき者有り。邑人之を奇とす。稍稍其の父を賓客とし、或ひは錢幣を以て之に乞ふ。父其の然るを利するや、日に仲永を抜きて、邑人に環謁して、學ばしめず。

余之を聞くや久し。明道中、先人に従つて家に還る。舅家に於て之を見る。十二三なり。詩を作らしむるに、前時の聞に稱ふ能はず。又七年、揚州より還り、復た舅家に到りて問ふ。曰く、泯然たる衆人なりと。王子曰く、仲永の通悟は、之を天に受くるなり。其の之を天に受くるや、材人に賢ること遠し。之を卒_おふるに衆人と爲るは、則ち其の人に受くる者至らざるなり。彼其の之を天に受くるや、此くの如く其れ賢なり。之を人に受けざれば、且つ衆人と爲る。今夫れ之を天に受けず、固より衆人なり。又之を人に受けず、衆人爲_たるを得るのみならんやと。

現代語訳

（江西省の）金谿県の一般平民の方仲永（の家）は、代々小作農を（家業に）していた。仲永は生まれて五年（になるまで）、まだ今まで文房具を見たことがなかった。（ところが、仲永は五歳を過ぎた時に）突然に泣きだしてこれ〔＝文房具〕を欲しがった。父親は（突然、仲永が文房具を欲しがったのを）不思議に思った。（そこで、父親は）近所（の人）に（文房具を）借りてこれ〔＝文房具〕を（仲永に）与えた。（すると仲永は、その場で）すぐに詩の四句を書き記し、（それに）並べて自分でその〔＝自分の〕名前を（記）した。

その詩は父母をいたわり養い一族の秩序を維持することを内容としていた。（驚いた父親は）村中の知識人に（このことを次々と）話してまわってこれ「〔仲永の書いた詩〕」を念入りに見せた。これから「〔仲永が初めて詩を作ったときから〕物を指さし示して（仲永に）詩を作らせると、たちまち（詩を）作りあげる（ようになつた）。その（仲永の作った詩の）文章の筋道はすべて注意して見た方がよいものがあつた「〔目を見張るほどりっぱなものだつた〕」。村人（たち）はこれ「〔五歳の子どもがりっぱな詩を作ること〕」を珍しいことだとした。しだいに（村人たちは）その「〔仲永の〕父を客人とし（て招くことをし）、ある者は（父親に）お金や引出物（を与えること）でこれ「〔父親〕」に（仲永の詩を書き与えることを）求める（ようになつた）。（こうして仲永の父は）それがそうであるのを利益とする「〔仲永の作る詩を村人たちに与えるのが儲けになる〕」（と判る）や、毎日仲永をひきつれて、村人（の家）を訪れまわつて（詩を作らせるものの）、（仲永に正式な学問を）学ばせなかつた。

私がこれ「〔仲永がりっぱな詩を作れること〕」を聞いたのはずっと以前（のこと）である。（北宋朝になつた）明道（年間）の間に、（私は）死んだ父について行き（金谿県にある郷里）の家に戻つた。（その時）母の兄弟の家でこれ「〔仲永〕」を見た。（この時にはもう仲永は）十二・三歳（になつていたの）である。（試しに仲永に）詩を作らせ（てみ）たが、以前の「〔初めて詩を作つた〕」時の評判に釣り合うことができない「〔かつての評判に相応しいものではなかつた〕」。（その時から）さらに七年（が過ぎた時に）、（私は）揚州から（郷里の家に）戻り、再び母の兄弟の家にやつて来て（仲永について）尋ねた。（母の兄弟たちが答えて）言うには、目立たない普通の人であると（言つた）。わたくしが（自分の考えを）言うことには、仲永の聰明さは、これ「〔才能〕」を天から授かつたものである。それ「〔仲永〕」がこれ「〔才能〕」を天から授かつた（という）のは、才能ある人に勝ることは遠い「〔仲永の才能は天から授かつたものであるから、才能ある人でも遙かに凌駕していた〕」ものである。（ところが）これ「〔幼少の時期〕」を終えると「〔結局、成長して〕普通の人になつてしまつたのは、それ「〔仲永〕」が人からうけるもの「〔学問の薰陶〕」が満足（する状態）ではなかつた（から）である。彼（仲永）がその「〔彼自身の〕」これ「〔才能〕」を天から授かることは、こういうよう「〔前段の話に述べたよう〕」にそれ「〔天才と才能〕」は賢いものである。（だが）これ「〔学問など〕」を人から授からないと、しかしながら（天才も遂には）普通の人になる。今そもそもこれ「〔才能〕」を天から授からないのは、初めから普通の人である。（ただでさえ普通の人）がさらにこれ「〔学問〕」を人から授からない（とするならば）、普通の人であることさえも適えられようか「〔普通の人には見えなれないのではないか〕」と（私は言いたいのだ）。

問1 1=イ 2=ウ

問2 3=ア 4=ウ

問3 5=エ
6=ア
7=イ

問4 イ
5=エ

書き下し文

大和上答へて曰はく、昔聞く、南岳思禪師遷化の後、倭國の王子に託生し、仏法を興隆して、衆生を濟度すと。又聞く、日本國の長屋王は、仏法を崇敬して、千の袈裟を造りて、此の国の大徳の衆僧に棄施す。其の袈裟の縁の上に四句を繡著して曰はく、山川域を異にするも、風月天を同じくす。諸の仏子に寄せて、共に来縁を結すと。此れを以て思量するに、誠に是れ仏法興隆有縁の國なり。今我が同法の衆の中、誰か此の遠請に応へて日本国に向かひ法を伝ふる者有るか。時に衆默然として一も対ふる者無し。良久しくして、僧祥彦有りて進みて曰はく、彼の國は太だ遠く、性命存し難し。滄海森漫として、百に一も至ること無し。人身得難く、中國に生じ難し。進修未だ備はらず、道果未だ剋くせず。是の故に衆僧咸默して対ふること無きのみと。大和上曰はく、是れ法の為の事なり。何ぞ身命を惜しまん。諸人去らずんば我即ち去るのみ。

現代語訳

大和上〔=鑑真〕は答えて言つた。「昔（このようなことを）聞いたことがある。南岳の思禪師〔=慧思〕が死んだ後に、倭國の王子に生まれ変わり、仏法を榮えさせ、人々を救つた、と。また、日本の長屋王は、仏法を敬つて、千着もの袈裟を作つて、この国〔=日本国〕の高徳の僧たちにさしあげた。その袈裟の縁に四句を刺繡して（そこにはこのように）書いてあつた。『山川異域、風月同天。寄諸仏子、共結來縁。』〔=山や川はそれがある場所は違つてゐるが、風や月はいつでも天にある。これと同じように、仏道を信じる大勢の仏弟子が寄り集まつて、一つの縁を結びたい〕と。これを考えてみると、（日本は）本当に仏法が榮えることに深い縁のある国である。さあ、同じように仏法を志すあなたたちの中で、誰か、この遠くからの要請に応じて、日本国に向かい教えを伝えるものはいなか」と。その時、人々は黙つてしまい、一人も（大和上の問い合わせに）答える者はいなかつた。しばらくして、僧の祥彦というものが進み出て言つた。「あの国〔=日本〕は大変遠く、命は保ちにくい〔=命がけの旅になるでしょう〕。海原は広々として果てしないので、百人（行つたとしても）一人もたどりつくことはないと思ひます。『人身難得、中国難生』（という「ここに生まれたことは光榮な

ことだ」という『涅槃經』の言葉もあります)。(ここにいる者たちは)修行をまだ(十分に)積んでおらず、成果は期待できません。そのために、僧たちは皆黙って答えないのです」と。(これを聞いて)大和上は言つた。「(これは)仏法の(修行の)ためだ。どうして命を惜しむことがあるか(いや惜しむべきではない)。皆の者が行かないならば、私が行くだけである」と。

解答

問1 口

問2 誰有_下応_ニ此_ニ遠請_一向_ニ日本國_一伝_レ法者_上乎

問3 二

問4 ハ

解説

問1 押韻の知識を聞く設問。文中にあるため一見気づきにくいが、3行目に「四句」とあるので、ここから漢詩に似た設問であると気づきたい。あとは押韻の規則に則つて、偶数句の四句目に当たる「縁」の字と同じく、enの音を含む選択肢を選ぶだけである。3句目に当たる「異域」と対句になっているので、場所を表す語が入ると分かれば完璧である。

問2 返り点の知識を聞く設問。早大で頻出ではあるが、今回は現代語訳がついているので容易である。「上下点は、一二点を挟んで使う」という点にだけ注意すれば大丈夫だろう。なお、「有_ニ～者_一」・「無_ニ～者_一」で「～なことがある(～な人がいる)」・「～なことはない(～な人はいない)」は、頻出事項なのでぜひとも覚えておきたい。

問3 解釈を問う設問。ポイントは二点。一つは、「即」(すなはち)という語が、仮定から結果を表す語であることを確認する。もう

一つは、「諸人→不去」と「我→去」が、対の表現になつていることを確認する。ここまでできれば、「諸人が去らなければ、私が去る」という直訳を作ることが可能である。あとはこの発言が大和上の発言であることを考えれば、「去」の字が「日本に行く」ことを指していることを捉えられるだろう。「去來」などの熟語を思い浮かべれば、「去」という字に「行く」という意味があることも想像できるはずである。なお、最後の「耳」の字は「のみ」と訓読し、強調を表す語なので覚えておきたい。

問4

本文内容一致問題。消去法を適用するのが基本。

イ 「自分も日本へ行こうと思った」が不適切。問2で確認したとおり、「誰か行くものはいないか」と聞いている。

ロ 「袈裟を送り届けられ」が不適切。3行目に、「此の国（日本）の大徳の衆僧に」とある。

ニ 「仕方なく自分が行こうとした」が不適切。8行目に「何ぞ身命を惜しまん」と反語で表現していることからも、強い主張であることことが分かる。

ホ 「引き止めるために無言で抗議した」が不適切。6行目の祥彦の発言に「性命存し難し」とあり、これが無言になつた根拠である。

ヘ 「まだ修行が不十分なため中国に生まれ変われないことを恐れて」が不適切。7行目「人身得難く道果未だ剋くせず」の部分は注もついていないため、読解は困難である。しかし、この部分が読解できなかつたとしても、直後に大和上が「何ぞ身命を惜しまん」と言つてていることから、僧たちが「死にたくない」ことを述べていると推測することは可能である。

なお、早大で注意したいのは、「内容と合致するもの」と聞かれる場合と、「趣旨」を聞かれる場合とで、出題の意図が変わることである。今回の正解であるハは、中心テーマとは全く異なつていることを確認しておきたい。

L3M
早大国語



会員番号	
------	--

氏名	
----	--